

## —活動報告—

## 石巻赤十字病院への被災地派遣

倉品 隆平

日本医科大学産婦人科学

Visit to Ishinomaki Red Cross Hospital, in the Disaster Area of the Great East Japan Earthquake

Ryuhei Kurashina

Department of Obstetrics and Gynecology, Nippon Medical School

日本医科大学女性診療科・産科、倉品隆平と申します。今回、本学会誌に投稿させて頂く機会を頂き、ありがとうございます。まず、今回の東日本大震災において亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

私は去る7月9日から16日までの1週間、武蔵小杉病院の柿栖陸実先生と、石巻赤十字病院産婦人科に派遣され、診療のお手伝いをさせて頂きました。ご存じの通り、3月11日に起きた東日本大震災により、地震と津波によって多くの病院も壊滅的な被害を受けました。宮城県石巻地区も、やはり津波によって甚大な被害を受け、多くの方が亡くなられました。石巻赤十字病院は比較的内陸に位置しており、幸い病院自体は津波の被害を免れましたが、震災当初はライフラインも寸断され、1日に1,000人以上の救急患者が搬送され、待合や廊下にまで患者さんで溢れかえり、野戦病院のようになっていました。これはニュースなどでも連日放送されたので、ご存じの方も多いかと思います。私たちの派遣された7月は、震災から4カ月経過し、震災直後のような混乱はありませんでしたが、石巻地区で通常診療業務を行っている数少ない基幹病院であるため、普段の2~3倍の救急患者さんの搬送があるようでした。産婦人科においても、近隣で分娩や通常の外来診療を再開できない病院やクリニックが多く、震災前と比較して約2倍、80~100件/月の分娩件数があるとのことでした。このため常勤医3人では業務遂行が厳しい状況であり、震災直後より日本産科婦人科学会が1週間ごとに全国の大学病院から2人ず

つ医師を派遣しており、7月9日から16日が日本医科大学の担当週間となったため、現地での診療に当たらせて頂きました。

まずは派遣の1週間前に、前任校の先生に連絡をとり、引き継ぎの時間調整を行って現地へ向かいます。私たちは東京から東北新幹線で仙台まで行き、本来はそこから在来線で石巻へ向かうルートがあるのですが、仙石線は地震のため未だ復旧のめどが立っていないため、仙台駅からタクシーで約1時間半かけ病院へと向かいました。平日は被災地へ向かうトラックや、ボランティアの方々の車などで、三陸自動車道がかなり渋滞するとのことでしたが、土曜日だったこともあって比較的道路も順調に流れていました。

石巻赤十字病院は5年ほど前に現在の場所に移転したばかりで、建物も新しく非常にきれいな病院です(写真1, 2)。以前の病院は海から近い場所にあり、今回の津波で跡地は崩壊したとのことでした。

産婦人科病棟のナースステーションで前任校の先生と常勤の先生から申し送りとコンピュータ・オーダリングの説明や、病院内の案内をして頂いた後、早速業務に入ります。われわれ応援の医師2人が、1日交代で当直に当たります。

産科病棟の分娩室は廊下をはさんでNICU(新生児集中治療室)があり、産科医としては非常に安心できる構造になっています。妊娠30週以降であれば、母体搬送の受け入れにも対応しています(写真3)。

手術室などもとても広く、シャワールームにはバスタオルも完備してあります。院内の売店にはフレッシュバーカーりもあり、毎日焼きたてのパンも売られ



写真1 石巻赤十字病院



写真3 どんなに辛くても、新しい生命の誕生は人を元気づけるものです。



写真2 院内には全国、海外からも応援メッセージ



写真4 津波で打ち上げられたままの船

ていて、労働環境はかなり高いクオリティーだと感じました。

派遣中の宿泊は、病院から車で約15分程の場所に、学会が半年間宿を確保しているため、当直でない場合はそちらに宿泊する、という形をとっています。9日の初日は柿栖先生が当直することになり、私は宿にチェックインをした後、石巻の街を歩くことにしました。

先ほども述べたように、石巻赤十字病院のある場所は津波の被害を免れ、病院周辺も大きな被害はありませんでした。病院の近くにはショッピングセンターなどもあり、週末でもあるため賑わいをみせていました。しかし、石巻の駅まで来ると、津波の影響によるヘドロの臭いがかなり感じられます。また、このヘドロの影響もあり、相当数の蠅が発生していました。商店街のアーケードも所々崩壊寸前で歩行が禁止され、車道を歩かなければならない箇所もありました。営業しているお店もありましたが、おそらく高さ2~3mまで来たと思われる津波の跡がまだまだ生々しく残っていて、1階部分が完全に流されている建物も数多くあ

りました。川沿いまで歩くと、震災から4カ月経過してもなお、信号機がついていないために、警察官が手信号で車を誘導している所もありました。津波で打ち上げられた船舶が横たわっている光景も実際に見ることが出来ました(写真4)。私自身被災地へ足を運んだのは初めてで、それ以前からテレビで惨状を色々と観ていましたが、実際にその光景を自分の目の前にすると、非常にショックであり、4カ月経ってもまだこのような状況に人々がおかれているという現実が、とても辛く感じました。

もし自分がこの状況に置かれたら、と考えると、一人の人間として、また医師として何か役に立つことができないか、そしてこの辛い現実を一人でも多くの人に知ってもらい、被災地のために手を差し伸べたいという思いが強くなりました。

次の日曜日、柿栖先生と当直交代し自分も業務に入ります。分娩進行中の方も数名入院していましたが、やはり東京の大学病院と比べて妊婦さんも若い方が多く、みなさん安産ばかりでした。その日の午前中には

強い余震があり、3月11日以来初めて津波が到来しました。私も被災地での大きな地震に緊張しましたが、それよりもやはり被災された方々、病院のスタッフや患者さんたちも不安な表情で、被災地に自分が来たのだという責任感を改めて感じました。

日曜の当直終了後は、月曜からいよいよ通常の勤務体制になります。毎日私たち派遣の医師は、当直明けの午前中が病棟業務、午後は外来、もう一人が午前外来、午後に病棟業務を担当し、その後当直に入る体制になります。

石巻赤十字病院の産婦人科は産科に重点を置いていて、震災後は分娩件数が約2倍に増えました。特に震災直後は電気、水道も止まり、入院患者さんの食事もおにぎり1つなど、ぎりぎりのところでの診療を余儀なくされたそうです。現在はそのようなことは全くありませんが、分娩件数が倍増したことで、当然外来患者数も増えています。さらに常勤の先生は、被災して自宅を失った分娩後の褥婦さんが、仮設住宅に入居できるまで近くのホテルに宿泊するための日程調整などのコーディネートをまでされていました。

地震と津波に加えて福島第一原発の事故のために、東北から東京や西日本へ避難する妊婦さんも数多くいます。自分も普段東京で勤務をして、何人か被災地からの妊婦さんを診察しましたが、実際に被災地の現場で話を聞くと家が津波で流されて、やっと最近仮設住宅に入居することが出来たという方や、放射線が心配で福島から同じ被災地である宮城へ来たという方もいました。みなさん被災され、家族や友人を亡くされた方もいらっしゃるでしょうし、今もお苦しい状況で生活されている中でも明るい方がとても多く、東北の人は我慢強いと言われますが、実際にそれが理解できたように感じました。病院の職員の皆さんも、自分自身が被災された中でもとても前向きで、病棟も笑顔が絶えず、逆に自分がエネルギーを頂きました。

日中および夜間もそれなりに多忙でしたが、看護師、助産師さんたちがみなさん良く対応して下さい、初めての病院で最初は慣れないこともありましたが、とても働きやすく充実した1週間を過ごさせて頂きました。1週間の間、特にトラブルもなく無事に終わり、16日に次週の担当校の大学の先生に業務の引き継ぎを行って東京に帰って来ることができました。

産婦人科では7月いっぱいまで部長先生が退職され、



写真5 復興へ向けて、街の人々の強い気持ちが伝わってきます

元々の派遣元である東北大学からは人員補充もないために、8月からは常勤医が2人になってしまうとのことでした。これからますます大変な状況に置かれてしまいます。日本産科婦人科学会からの医師派遣は9月いっぱいまで終了し、10月から12月までは宮城県立こども病院から医師を派遣する予定になっているとのことです。来年以降応援がなければ、石巻の周産期医療は厳しい状況に置かれることになります。

石巻赤十字病院は被災地の中でも津波の被害を免れたため、比較的すぐに震災前の診療体制に戻ることができましたが、今回の大震災では多くの病院が地震と津波で多大な被害を受け、廃業を余儀なくされたり、現在も診療が再開できないところはまだまだあるはずです。今もお厳しい状況の中で診療を行っている医師、看護師、すべての医療従事者の方に敬意を表します。そして一日も早く復興し震災前の生活に戻ることが出来るように願うばかりです(写真5)。

今回、実際に被災地に足を運び非常に貴重な体験をさせて頂きました。今後もぜひ一人の医師としてお手伝いできる機会があればと思います。

(受付：2011年8月25日)

(受理：2011年9月8日)